

お嬢さまと  
お姉ちゃん  
幼馴染に告白されて  
ヤキモク修羅場な件

小説 筆祭競介

挿絵 カズナリ

立ち読み版



……宏の恋人は  
私なんだからね。



つきがせれな  
**月ヶ瀬怜奈**

宏のクラスメイトで、月ヶ瀬グループの令嬢。いつもツンとした表情をしているが、実は優しくて素直な性格。誕生日プレゼントと称して、最初に宏に告白してくる。



## 登場人物紹介

Characters

しんどうひろし

**新堂宏**

彼女いない歴＝年齢の男子学生……だったのだが、美少女三人に告白されて修羅場に叩き込まれる。

ひーくんは、部活と恋人、

どっちが大事なの？



しんどうもも か

### 新堂桃香

宏の義理の姉。生徒会長を務めていた人気者だが、弟に対してはひたすら甘く、人目をばからずにイチャイチャしてくる。宏に告白した順番は三人の中で最後。

お兄ちゃんとして少しでも長く

一緒にいたいんですから。



はなさき

### 花咲みゆり

宏の幼馴染み。同じ園芸部に所属しており、大人しい少女。宏を想うあまり、言動が過激になってしまう一面も。怜奈の次に宏に告白してくる。

序章

美少女三人に連続告白されたわけだが

007

第一章

皆が俺の彼女になったと勘違いしてる件

020

第二章

ツンなお嬢さまと初体験

051

第三章

爆乳お姉ちゃんとヌルヌルプレイ

087

第四章

ヤンな幼馴染みに中出し宣言

122

第五章

ヤキモチ彼女たちと連続エッチ

168

第六章

修羅場のち4Pハーレム

198

終章

ハーレムエンドだと思ったら〇〇で俺涙目

252



胸を責められあれだけ喘いでいただけに、その入り口はすでにじつとりと濡れていた。怜奈が己との行為で、具体的にこんな状態になっていたと認識した途端――。

「うわあああ……ぬ、濡れてる……こんなにもお……」

なんだか言葉にならない欲情が湧きあがって来て、己の股間が痛いほど張り詰めた。

宏は凄まじいスピードでバスローブの紐も解き、すでにギンギンに勃起しているペニスを剥き出しにする。

「ッッッ!!」

すると怜奈が反射的に、両脚を再びキュッと閉じた。

薄っすらと開いた瞳がこちらの股間を見つめている。

「……やっぱり……怖い？」

「……………ちよ、ちよつと……」

いつもの調子で『そんなわけないでしょ』的な強がりを言ってくるかと思ったが、怜奈はこちらに縋るような視線を向けてくる。

「でもアンタなら……宏が相手なら……………大丈夫だと思っ」

ドッキン！

これがいつも自分の顔を見れば、罵倒してきた高飛車お嬢さまだろうか。そんな相手にこんなふうに認められると、なんだかとても気分がいい。

「優しくするから。精一杯、優しくするから」

「……うん♥」

頷く怜奈が、全てを自分に委ねきったような笑顔を見せた。

（なんか今の月ヶ瀬……素直すぎて、めっちゃ可愛いよ！）

これで優しく抱けないようでは男がすたる。

しかし童貞の宏が冷静でいられるわけもなく、胸の奥はドドドドッと凄まじい音を立て続けていた。

（落ち着け！ 落ち着け、俺！）

宏は一度大きく深呼吸してから、怜奈の両足を掴み改めて大きく開かせた。

視線を下に向けると、先ほど以上に濃く潤みの滲んだ女の割れ目が見える。

「い、入れるからね。このまま怜奈の中に、お、俺のをゆっくり」

右手で己のペニスを掴むと、緊張と興奮でブルブルと肉先を震わせながら、彼女の股間にあてがった。

金色の茂みから少し下がったところで、赤と青の血管をビキビキに浮かせた肉キノコが女の蜜路を探り出す。

そして亀頭の先にチュプンと熱い潤みを感じた瞬間、全身に官能の稲妻が駆け巡った。先っぼだけでコレだけ気持ちいいのだ。

このまま全部、丸ごとこの中に埋めきつたらと思うと、鼻血を吹き出しそうなほど頭にカーッと血が昇る。

「い、いくぞッ!」

「うん。きて」

宏は焦る気持ちを懸命に抑え、慎重に腰を押し出していった。

肉先が今まで味わったことのない、熱くてヌルヌルな愉悅の中に埋まっていく。

「つくおとおおお……」

その快感量は、明らかに想像以上だった。

亀頭に密着してくる膣襞のしなやかな感触に、背筋がゾクゾクゾクつと肉悦に震え、口から甘い声が自然と漏れる。と。

「あっ、宏が……入って——っはあああああ!」

それまで自分に全てを委ねていた相手が、弾かれたように全身を弓反らせた。

宏はびっくりして視線を二人の結合部に向けると、そこには彼女が自分のモノになった紅の印が滴っている。

「だ、大丈夫!!」

「全然平気……ってわけじゃないけど……ッッ……大丈夫。続けて」

事が流血沙汰なだけに宏も少しビビッたが、怜奈の表情を見る限り問題なさそうだ。



無論、この程度でペニスの漲りに変化はない。

さらに慎重な腰つきで、男根を最後まで埋めきった。

なにしろ宏もこれが初体験。

愛液のたっぷり滴る女性器と、なんの隔てもなく一つになった強烈な密着感に、

（ヤバイ！ 今動いたらすぐにイッチャウ！）

股間から生えた僅か十数センチの肉棒で感じている肉悦が、全身の隅々まで行きわたっている。

対して怜奈は限界まで弓反らせていた身体をベッドにトサツと落としていた。

それでも破瓜の余韻がキツいのか、顔を横に逸らし下唇を噛んでフルフルと頬を震わせている。

そんな相手の横顔がとてつもなくいいらしく見えて、

（……キスしたい）

宏は無意識に片手を伸ばしお嬢さまの細い顎を掴むと、ツイとこちらに向けさせた。すると怜奈はびっくりしたように瞳を大きく見開いたが——ンちゅう。

相手に何も言わず、その唇にむしゃぶりつく。

（もう、ここまでしちゃったんだから……ディープキスも、しちゃっていいよね！）

初結合の興奮もあって、勢いで舌までヌルンと入れてみる。

「んん!!」

怜奈が明らかに驚きの声を口内で上げた。

（うおおお!! 何、この気持ちよさ!!）

自分の舌が相手の舌に当たった瞬間、眉間にビリッと突き抜けるような衝撃が走る。さまざまな旨みを感じする舌の味蕾が、強烈な快感味一色に塗り潰された。

セックスが気持ちいいことは容易に想像がついたが、ディープキスは予想していた以上に気持ちいい。

宏はもつとその愉悅の味を舐めまわすため、彼女に深くペニスを埋めたまま夢中で舌を躍らせ始めた。

「ん♥ ひ、ひろしい——んんんっ」

血の流れた下半身の初結合と違い、ディープキスの快感は怜奈も同じように感じているようだ。

——れるおん。んくちゅッ。ぺろへろんチュウウッ。

と、彼女から舌の動きをこちらに合わせ、ロストバージンの痛みで強張っていた女体からも徐々に力みが抜けていく。

宏もすぐに暴発しそうだった下半身の大波を、その間にやり過ごすことができた。そうして存分に味覚器官を絡ませ終わると、ゆつくりと上半身を起す。

その際、ヌルンと彼女の口から舌を抜くと、

「ああん。も、もつとお……」

怜奈が露骨に名残惜しそうな顔をしてこちらを見上げてきた。

こちらが驚いた顔をする、相手も自分の咄嗟に出た言動の意味に気づいたようです。まず顔を赤くする。

それでいて、強張りの解けた膣壁たちはしなやかにキュンとペニスを締め付けてきた。

まるで、そちらでも「もつとお」と行為をねだるように。

「今度はこっちでも、二人で気持ちよくなろうな」

宏は一番奥まで入れていた腰をゆつくりと引き戻し始めた。

「あ、中が擦れて……ああ——ンあああああああ！」

すると怜奈が、再び顎を大きく反らせる。

両手もこちらの背中に回されて、強く握り締められた。

宏もカリ首の出っ張りがキツイ膣壁の内側と強く擦れ合い「ツツうつ」と強く奥歯を噛み締めている。

しかし破瓜時と違い、相手の声や表情に痛みはほとんど窺えない。むしろ、（むちゃくちゃ感じてるみたいに見える）

その艶姿にさらに剛直が漲り、腰をゆつくり突き出していた。

「あつ。す、すごい……宏のが……ああつ、私のお腹の中をいっぱいにしてるみたいで」  
怜奈がたっぷりと潤んだ瞳を糸のように細くしながら、こちらを見上げてくる。

（なんか、ほんとにいつもと全然雰囲気が違う！）

いつも強気で凛と張り詰めている美貌が、今は従順に弛緩していた。

「……ああん。こ、こんなの……だ、だめえ」

しかも今の彼女はウルウルした上目使いで、すがりつくように、こちらの背中をキュッと握り締めてくる。

ゾクゾクゾクゾクッ！

背筋に今まで感じたことのない種類の震えが走った。

（もつと……もつともつと、コイツのこと気持ちよくさせたい！）

無論、それが自分の肉体的な気持ちよさにも直結している。

肉先で彼女の最深部を強めにコツンと打つと「あん♥」と可愛い声と共に、切れ長の瞳がすぐにフニャンと垂れ下がった。

突然の衝撃に驚いた膣壁たちが、ペニスをキュンと絞り込んできて、自分の口からも「あッ」と肉悦の音が漏れてしまう。

「ねえ、怜奈。俺とのセックス、気持ちいい？」

「ツツツツツ!? こ、こんな時に、なにいきなり恥ずかしいこと聞いてくんのよお」

「こんな時だからだろ。だって俺、めちゃくちや気持ちいいからさ。お前のアソコ、奥までヌルヌルのホカホカで、チンコが溶けちゃいそうなほど気持ちいいから」

「な、ななな……」

「で、怜奈はどう？ 俺のチンコ気持ちいい？」

「……そ、そんな……聞き方、ず、ずるい——あん♡」

頬を小さく膨らませてプイと横を向いた相手の仕草があまりに可愛く、じつくり突いていた腰に思わず力が入ってしまった。

その直後に漏らした喘ぎ声がまた可愛く、

「あん♡ あん♡ ああん♡ あん♡ ンああああん！」

突入の勢いが、だんだんと速くなっていつてしまう。

形のいい美巨乳がタプンタプンと大きく弾みだし、さらに牝の欲情を煽られる。

しかも——。

「き、きもちいい……ア、アンタの……お、おちんちん……すっごく気持ちいいのお！」

もう我慢の限界です。

「うおおおおおおお！」

宏は両手で怜奈の太股を抱えるように抱き、男根をフルスピードで突き込み始めた。

「ああっ、そんなに激しく——んはああああああああああ！」

まるで痙攣するような突入に、怜奈の顎が弾かれたように上を向く。

「らめっ！ ああっ！ 気持ちいい！ 宏のお腹の裏側にコリコリ擦れてえ！ 奥に先っぽがズンズン当たってええ——ンああああ！ きぼちいいイイ！」

先ほど散々言いよんだ類いのセリフも、一度口にしてしまうと歯止めが利かなくなるようだ。

宏のおちんぽ気持ちいい、と連呼しながら見事な金髪を振り乱して身悶えている。

こんな姿を見せられて、これが初体験の少年が長く持つはずがない。

「ああっ、もう、イク！ イクぞ！ イッチャうぞおおお！」

高速で子宮を打つ亀頭には無数の膣襞がきつくへばりつき、脳天に突き抜けるような肉悦を爆発させている。

腰の奥ではもう引き返せないところまで、官能の昂りがパンパンに膨らみきつていた。

「んはああああ！ わ、私ももうだめええええ！ 何なのこれ!? 何かくるううう！ 腰の奥から何かくるうううう！」

初めての交わりで、先に達したのは怜奈の方だった。

肉悦にずつとビクつき続けていた女体が、息んだように強張ったその直後——。

ぶしやあああああああああ！

盛大に熱い飛沫を吹き出した。



対してこちらは、すでにヌルヌルでグッチョグッチョな濃厚ディープキスを経験済み。その差が出ているのだろう。

「っ……うん♥」

試しにこちらから舌を触れさせてみたら、電流でも走ったように桃香が身体をビクンと跳ねさせた。

互いの味覚器官を重ねる初めての快感に、グラマーな女体が敏感に反応したようだ。

（そうは言っても俺だって！）

ディープキスの経験はあるが、人並み以上にこの手の耐性があるわけではない。

口腔内で炸裂した熱い愉悦に、若い肉体が勝手に反応。前屈みで馬乗りしている義姉の背中に手を回し、自分側に強く引き寄せてしまった。

「んんっ!？」

そんな意外なこちらの積極さに、相手が驚きの声を口内で上げたが無視。

重なりあった味覚器官を、鼻息荒く自分から絡みつかせていく。

——ぬるるん、クチュっ、レロ、ンちゅ、れろろろッッ。

舌同士が強く擦れあうことにより、しなやかで柔らかな肉片の感触を味わえる。

そのヌルつとした感触は、理屈もへったくれもなく、

（も、も、桃ネエー……！）



若い肉体を極彩色の官能へと導いた。

今まで思春期ゆえの気恥ずかしさや人としての倫理観で、義姉の積極的なアプローチを掻い潜ってきたがもう限界だ。

彼女の背中を引き寄せていた手に思いつきり力が籠る。

と、桃香がそんなこちらに驚いたのか、キスを解いておもむろに顔を上げた。

「ハアハア……んもお♥ ひークンのクセにい、ちよつと積極的すぎだぞお♥ んはあ♥」

甘い美貌をますますトロロと蕩けさせた義姉に、鼻先をツンと押されてドキツとする。

そして、ディープキスをこちらからしたことを、

「お姉ちゃんが相手だからって、そんなにハアハアしちゃダメだよ♥」

若い興奮ゆえの暴走だと勘違いしてくれたようだ。

彼女は宏に馬乗りの状態のまま身体を捻ると、自身の鞆を引き寄せた。そして中から怪しげな瓶を取り出し真横に置くと、改めてこちらに向き直る。

「うふふふつ♥ 今からが御馳走のメインデッシュだよお♥」

甘い微笑みを浮かべながらワインレッドの上着のボタンを一つ一つ外していく。そのたびに白いシャツの中から『たゆゆん』と、ありもしない効果音が聞こえてきそうな重量感で胸元が揺れる。

首に巻かれたピンクのリボンを桃香がしゅるりと外す頃には、宏の両目は完全に血走っ

ていた。

「うわあああ」

そして思わず感嘆の声が漏れたのは、義姉が白シャツのボタンを全て外し、ブラまでハ  
ラリと落とした時。

たわわに実った特大バストを下から見上げ、ゴクンと大きく喉が鳴る。  
(で、でっかい……)

その迫力に、ただただ哑然。

怜奈も素晴らしい巨乳だったが、サイズだけなら桃香の方がさらに上。  
腹に馬乗りされているため視界に映るのは下乳なのだが、その形は全く乱れのないもの  
だった。真っ白なたわみがボリューム満点な乳肉の全てを支えている。

下乳が薄いウエストに対して直角に切り立ったその光景は、世界中のどんな名所よりも  
絶景だ。

「……こ、こんなすごいおっぱい……は、初めて見た……」

知らぬ間に、思ったままのセリフが口から出ていた。

「……これだけすごいおっぱいなら……他に見たことあるってこと？」

最大級の賛辞に対し、桃香が妙な具合にヤキモチセンサーを働かせて焦らされる。  
「ちがっ……そういう意味じゃなくて……そのお、グラビアとかの話で……」

「ふーん。でも、これからは写真とかでも、お姉ちゃん以外のおっぱい見るの禁止だよ」  
写真に対してまでヤキモチを焼いてくる義姉に、宏は言葉もない。

「その代わり『こんなすごいおっぱい』で、いいこととしてあげるからね」  
先ほど横に置いた例の瓶を彼女は手に取りキャップを外す。それをゆっくり逆さにする  
と——とおおおつ。

透明の粘液が流れ出し、桃香が自らの掌に溜め出した。

「えっ？ ……な、何……それ……」

「ん♥ ローション♥」

桃香は自慢げにウインクすると、たつぷりと掌に溜めた粘液を——ぴちゃん。  
剥き出しにした己の胸にぶちまけた。

そして——ヌルン。たぷルん。ぬるぬるるるっ。

自らの手で、巨大な乳房全面にローションを塗り広げていく。

（い、いったいこんなの、どこで手に入れて……）

そこまで考えた時にハッとする。

怜奈との初デートの時。メイン通り外れのちよつとアヤしい所で義姉を見かけたのは、  
これを購入するためだったんじゃないや……。

「ヌルテカ好きなひークンに最高の初体験をさせてあげるね♥」

そこまでしてくれたんだ、という嬉しさと、自分に向けられる愛情百パーセントの笑顔。加えて、粘液のぬるみにより摩擦係数が極端に落ちた柔肉が、彼女の指の動きに合わせてなめらかにその形を変えていく。

それは素のバストをただ揉むだけでは見られない、とても淫らな牝肉の動きだった。

もともと素晴らしくきめ細かだった乳肌がローションによつて濡れ光り、たまらなく卑猥な光沢を放っている。

(エ、エロい……こんなの……エロすぎる……)

以前、彼女に指摘されたように、自分は巨乳好きだしこうしたヌルテクなシチュも好きだ。そんな諸々が一つになつて目の前に現れ、頭の奥がカッと熱くなり――。

「うあああああ！ 桃ネエえええええ！」

気づいた時には、自ら両手を伸ばし夢中でローションまみれの乳房を揉みしだいていた。(すごッ！ なにこれ！ めっちゃプルンプルンで超気持ちいい！)

柔肉がパンパンに詰まった特大バストとローションとの相性は、宏がアダルト動画などを見て想像していたよりも遥かに上だった。

掌で感じる肌触りのよさや柔らかさが、何倍にも跳ね上がっている。

試しに、指の腹でグッと押し込むと、他に例えようのない素晴らしいポリウム感と共にヌルルンと乳肉が滑り、指が振り抜かれる。

その感触が背筋にゾクゾクと震えが走るほど心地よい。

まさに、やみつきになる揉み心地で、義姉の胸をまさぐる手が止められない。

「ああああん♥ ひークンの手つき、エッチすぎい♥」

桃香は腹に馬乗りのまま前屈みの姿勢になって、さらに胸を揉みやすくしてくれた。

ローションの潤滑油効果で、ヌルン、たぶるん、とそれが自在に弾む光景は、弄ぶという形容がぴったりだ。

「だ、だって桃ネエのおっぱいと身体がエロすぎるからあ」

そう。宏を夢中にさせているのは、ローションバストの揉み心地だけではない。

こちらが指先で乳首を擦ると、桃香の女体はびくんびくんと敏感に反応するのだ。

それに合わせて、常にマイペースな義姉の口から「あん♥」と甘い声も漏れている。

これほど大きいサイズのクセにその感度は抜群だった。

「ひークンもすごいことになってるよ♥」

「わっ、そこは——はうあああ!!」

ローションをハンカチで拭った手で、制服のズボンの上から股間を掴まれて、今度はこちらが声を上げさせられる。

「ホントにすつごーい。ズボンの上からでも、ガッチガチになってるのがよくわかる」  
ずっと宏の腹に馬乗りしていた義姉が、やっと上から降りてくれた。

しかしもう、今の宏に逃げる意思は全くない。

制服のズボンで脱がされ、股間を露出させられても為すがまま。一切抵抗しない。

（な、なにされるんだろう……）

むしろ理性の籠が外れた今は、期待感で一杯だった。

「わぁ。これがひーくんなんだぁ♡」

桃香は頬をほんのり赤らめて、指先で亀頭をツンツンしながら「昔と色も形も全然違う」と呟いている。

「それじゃあひーくんの大好きな、お姉ちゃんのヌルテカおっぱいで気持ちいいことしてあげるね♡ だから、もうちょっと前に移動して♡」

宏は巨大な机に腰かけたまま横になった状態で、膝から下は机の端からブラ下げていた。その状態から義姉の指示で、尻を机の縁ギリギリまで移動させる。

「よーくし♡ それじゃあ——」

机から下りた桃香は上半身だけこちらに覆いかぶせ、ローションで濡れ光る胸の谷間にペニスを置いた。

その特大バストの狭間で見ると、己の男根がなんだかとても小さく映る。

桃香は両脇からその豊かすぎる胸を一気にすくい——ずにゅん♡

「はおうううつ♡」

ペニス全面にかかる心地よすぎる柔らかさに、顎が跳ねるように仰け反った。「コレ、パイズリっていうんでしょ♥ お姉ちゃんは、弟の好きなことはなんでも知ってるんだぞ♥」

ふふーん、と得意げな顔をしながら、さらにギュッと挟んでくる。

いつもなら苦笑いするセリフだが、とてもそんな余裕はない。

なにしろ手で揉んでいただけでもあれほど気持ちよかった極上巨乳に、男根がすっぽりと包まれているのだ。

ペニスのいたるところから『気持ちいい』『柔らかい』という信号が大量発生。いきなり暴発しそうになり、慌てて奥歯を噛み締めた。

そんな宏の切羽詰まった顔が嬉しいのか、義姉はますます得意げな表情をして、「ほーら、ほら。お姉ちゃんのおっぱい気持ちいいでしょ?」

両手でギュッと押し挟んだ胸をタプタプと小刻みに揺すり出した。

もちろん胸の谷間は、今もたつぷりローションにまみれている。

「す、すごッ。き、気持ちいいッ……これ、すごッッ!」

無粋な引っかけがまるでない状態で、この特大バストに揉みしだかれているのだ。

ペニスの左右からギュッとかかる柔らかな感触が肉棒の芯まで浸透し、宏の意識を肉悦一色に染め抜いた。

「ああん♥ ひークンのおちんちんがおっぱいの中でビキビキしてるよお♥」

挟まれる前の段階で完全に勃起していたが、その硬度はさらに跳ね上がっている。

「あつ、なんか、コレ……き、気持ちいいかも♥」

しかも桃香までパイズリしながら、はあはあ、と艶っぽく息を乱し始めた。

ペニスを包む極上の肉悦と、視界に映るそんな官能的すぎる光景に、

「ヤバっ！ も、もう、イッちゃうー！」

宏は桃香の肩を掴み、強引にその上半身を引き離していた。

ビクンと男根が弓反りになって、深すぎる胸の谷間から解放される。

対して桃香は自身の胸を両手で寄せ合わせたまま、キョトンとしていた。

「え？ 別にいいよ？ お姉ちゃん、男の子が気持ちいいとイッちゃうってこと、ちゃんと知ってるよ？」

「い、いや、その……だって、桃ネエの初めてが、その……俺を一方的に気持ちよくさせて終わるだけってのは、その……」

桃香は絶対、男相手にエッチなことをするのはこれが初めてのハズ。

なのにその最初がパイズリだけではあまりに申し訳ないではないか。

「……もう、ひークンたら大胆なんだからあ」

ポッと頬を赤らめた義姉が、不意にこちらの胸をツンツンしてきた。





みゆりの細いウエストを掴み、グツとそれを下に押し込む。結果、限界まで膨張した男根をしなやかな二人の腹に強くズニユンと押し挟まれて、

——どぎゅん！ ドリユドぶッ！ ドギユドぶどりゅんッ！

細くなつた尿道の中を灼熱の粘液が一気に駆け抜けていく。

アナルに捻じ込むように差し込まれた怜奈の舌を、脈動にあわせてギユムギユムと絞りながら、宏は長く絶頂し続けた。

「くふあああ……っは……ああ〜」

そうして『姉妹』の間で壮絶な絶頂を終えると、身体のバランスを崩すようにして、ドサツとベッドの上に倒れ込んだ。

上下で重なりあっていた桃香とみゆりも、今はぐったりして荒い息をついている。

そんな中、ただ一人性的絶頂をしていない怜奈だけが、

「もう……こんなにドロドロにしちゃって……」

壮絶なエクスタシーのために三人が分泌した諸々の体液を、タオルで拭いてくれていた。そして彼女自身も、宏のアナルをしっかり舐めてくれたからか、部屋に備え付けられている洋酒で口の中をすすいでいる。

「……………怜奈ちゃんて……………いい子ね」

「……………なんかちよつと……………イメージと違います」

怜奈と付き合い出してから宏が感じていることを、自分と付き合いの長い二人も同じように感じたようだ。

超お金持ちで、超美少女で、高飛車な物言いをするだけに、その性格を誤解されやすいのだが——怜奈はとってもいい子なのだ。

「な、何いつてるのよ……わ、私は別にそうじゃなくって……今のは……お、女の勝負だったから」

澄ました顔をして受け流そうとし、それが上手いかずに照れて顔が赤くなる。

その姿がまた可愛く、鼻の下がデレンと伸びてしまう。

幼馴染みである二人は、こちらの表情からそれを察したのだろう。

「……誰が一番いい女なのかの勝負だと、このままだや月ヶ瀬先輩になっちゃいます」

「そうならないためにも……今度は私たちが怜奈ちゃんを気持ちよくしてあげる！」

最初はとんでもない修羅場だったはずなのに、またヘンな方向に話が流れ出した。

「あん！ ちよつと、何を突然——きゅふン！」

桃香とみゆりに怜奈が再びベッドに引き込まれ、仰向けに押し倒された。

「桃香さんのおっぱいもすごいですが……月ヶ瀬先輩のおっぱいもすごいです」

と黒髪の幼馴染みが上半身を愛撫し始めて、

「ココね」。私のひークンといけないことしたのわぁ。お毛々がいっぱい生えてるからっ

てナマイキよお」

「も、桃香さん……そ、そんなところ——ああン！」

義姉はお嬢さまの股間に顔を埋めて、ピチャピチャと湿った音を響かせ出した。

「ほらほら。ひークンも、さつき怜奈ちゃんにいっぱい気持ちよくしてもらったんでしょ」  
「そうですよ、お兄ちゃん。このままじゃ私たちも気持ちが悪く着きません」

女の矜持で二人にメイド衣装を貸した怜奈と同じく、この二人も借りがある状態では気が済まないようだ。

宏も彼女たちに誘われるまま、フラフラと三人のもとに近づいていった。

「ンはあ！ な、なんで……ああン！ 女同士で、こんなこと——ツツくうううう!!」

「さつき月ヶ瀬先輩も、私たちを気持ちよくしてくれたじゃないですか——ンちゅううう」  
怜奈はすでにメイド服の胸元を開けられていた。

宏はまずみゆりの隣に並び、同じように剥き出しにされた左胸にしゃぶりつく。

「うわっ!! 乳首がもうこんなにガッチガチになってる！」

そのまま右手を彼女の股間に伸ばしてみると——レロン、ぴちゃレロペろチュううう。

宏の指先が這い出してもお構いなく、その上からこちらの指ごと桃香の舌が舐め続ける。

「あああン！ そ、そんな、三人がかりで——つくひやあ、んはあああああ！」

両乳首にクリトリスという、女体でも特に敏感な突起をそれぞれ同時に舐められている

のだから、怜奈が身悶えるのも無理はない。

（それにしても、相変わらずメチャクチャ敏感だよなあ）

しかも男の自分だけではなく、女である桃香やみゆりも、自分の責めに対するお嬢さまの反応に興奮気味。

「ほら。もう、こんなにトロットロになってるう。今がブチ込み時だよ」

そのためか、自らの舌に透明な糸を引きながら、あの桃香が挿入までも促してくれた。チラッと隣のみゆりに視線を向けてみても、

「綺麗でまあいい先輩のおっぱい……綺麗でまあいい先輩のおっぱい……」と年上のお嬢さまを責めることに熱中していて、特に問題はなさそうだ。

宏が怜奈の股間に移動すると、それまでそこを占拠していた桃香は横に退いてくれた。「入れるぞ」

彼女の入り口に肉先をあてがうと、お嬢さまは息もたえだえにコクンと頷く。

結合前から散々、全身の性感帯を責め抜かれた牝華は、信じられないほど大量の熱い蜜で満ちていた。

入れた直後からペニスの体積分の愛液がジュプリと溢れ出て、

「ああン♥ ひ、ひろしい♥」

怜奈の口からも甘い喘ぎ声が漏れ続ける。

根元まできっちり中に埋めきると、二人の口から同時に「はあぁっ♥」と甘い吐息が漏れた。

いつも気の強い光を放つ切れ長の瞳もトロンと蕩けきり、ジッと自分を見つめてくる。宏はトロットロに蕩けきった女性器との、互いが溶け合うような一体感を味わいながら、じつくりと腰を揺すり出す。

「もう。こんなに美人さんのクセに、ひークンを好きになるなんて。なんでそんなに見る目があるのお」

いつの間にか怜奈の隣に移動した桃香がプンプンと口で言いながら、ノーブルな美貌を自分の方に向けて、

「っはあ、そ、それは、ああん、私のセリフレえ——んぐうう!？」

お嬢さまが続けようとしたセリフを呑み込むようにキスをした。

しかもおぎなりなフレンチキスではなく、舌を深く入れたディープキス。

「うわぁー」

おっとりお姉さん系美少女と、高飛車お嬢さま系美少女が目の前でクチュクチュとねちっこい音を立てながら舌を絡ませあっている。

その妖艶な光景に、宏は腰を突くのも忘れてボーっと見惚れた。

みゆりと桃香の時もそうだったが、美少女同士のハードなディープキスは見てるだけで

も充分にエロい。相手が男ではなくどちらもある自分の恋人なので、変な嫉妬も起こらない。宏はゆつくりとそこに顔を寄せていき、二人が絡めていた舌をペロリと舐めた。

「はぁあん、ひろしい♥」「ひークンもお、ペロをレロレロしよお♥」

舌同士を絡めていると、意外に力が籠っているものだ。

それを横から舐めると、普通にディープキスしている時とは少し違ったしなやかな弾力が味わえる。

「三人だけでそんな気持ちよさそうなこととしてえ。私も仲間に入れて欲しいですう」

胸を夢中で責めていたみゆりも、すぐに加わってきた。

正常位で繋がっているだけに、まずは顔の向きを真っ直ぐにして怜奈と正面から舌を絡めあう。そして、そのヌルヌルと絡み合う二枚の肉片の側面から、桃香とみゆりがさらに舌を絡みつかせてくる。

時には絡めあっている舌の間に舌先を滑り込ませ、時にはディープキスしている舌の柱をペロンペロンと上から下まで何往復もする。

（ヤバイ、ヤバイ！ これ、舌が溶けちゃいそうなほど気持ちいいー！）

並のキスでは決して味わうことのできない肉悦に陶然となりながら、夢中で舌を躍らせ続けた。

それは怜奈も同じようで、宏が動いていないのに、根元まで埋めた蜜壺がヒクンヒクン

と突発的に痙攣し始める。

「ああーん。怜奈ちゃんつてば、こんなにエロく身体がビクンビクンしてるう」

「月ヶ瀬先輩つて、ホントにエッチな身体をしてますね」

自分たちも同じような敏感体質のクセに、と思ったが無論そんなことは口にしない。

桃香とみゆりの舌と指は、再びお嬢さまの女体を責めることに向かっていく。

「はあああん！　そ、そんならあ、三人がかりれえ——んああン！」

宏と身体を繋げたままの怜奈の右手側に桃香、左手側にみゆりが張りつき、今は身体ごと彼女に絡みついていた。

おっぱい好きな宏はそのまま左右に手を伸ばし、桃香とみゆりのバストもメイド服から出して直に揉む。

「あああん。こんな時までお姉ちゃんのおっぱいモミモミしたいなんてえー」

「とにかくお兄ちゃんが、おっぱいが大好きなことだけはよくわかりました」

そんなことを言う二人も、セリフの内容とは逆にどこか嬉しそうだ。

宏は両手で二人の乳房を掴んだまま、ゆつくりと怜奈とのセックスを再開させた。

——たっぷん、たぶぷん、たぶたぶぷん。

なにしろ場所は、スプリングのよく利いた巨大ベッドの上である。自分の動きに合わせて、彼女たち二人も怜奈と同じように身体が揺れた。



三人とも豊かな胸をしているので、同じタイミングで上下に並んで弾み出す。

（たままないよコレ！ 怜奈とだけじゃなくって、桃ネエとみゆりちゃんとも同時にセックスしてるみたいに見える！）

それをより錯覚させるのが、怜奈の女体がビクッと震えると、それに合わせて他の二人も甘い喘ぎ声を漏らしたりしていることだ。互いに身体を擦り合わせているだけで、敏感な彼女たちも濃い官能を感じ取っているらしい。

そんな濃密すぎる4Pセックスを、じつくりたつぷり堪能していたら、

「ヤバッ!? も、もうイキそうになってきた!」

肉体的な愉悅だけでなく、視覚的な妄想も手伝って、これが今日三度目だというのに、もう腰の奥がムズつき出した。

すると、今まで悩ましげに宙を舞っていた怜奈の両脚が、こちらの下半身を逃がさないように腰に絡みついてくる。

「お、おい!? 俺がなんて言ったのか聞こえなかったのか!」

これではイク直前に外出しできない。

と慌てるこちらの顔をお嬢さまが、下から覗き込んでくる。

「……二人には中に出したんでしょ?」

「ちよっ、なんだよこんな時に! マ、マジでやばいって!」

「こんな時だからよ。どうなの？」

「……そ、それは……」

と言いつつ淀むが、こちらのそんな態度からすぐに事実を察したようだ。

「なら私にも中出しして！」

「つて、お前……その。もし……デキちゃったら」

「大丈夫な日だから、心配しないで。……あと、一応今日のために……大丈夫なようにピルも飲んできてたし……」

と恥ずかしそうにゴニョゴニョ。

（れ、怜奈が……そこまで……）

その濃く恥じらった表情と、自分と中出しセックスするためにお薬まで飲んでヤル気満々だったお嬢さまの気持ちを考えて――。

「うおおおおおおお！」

牡としての昂りが、一気にマックスまで跳ね上がる。

腰に足を絡まれてから止めていた獣の動きを、フルスピードで再開させた。

「んはああああん！」

直後に怜奈は大きく顎を仰け反らせ、こちらの腰に絡めていた両足が再び淫らに宙を漕ぎだす。セックスの快感が凄まじいのか、もうその必要がないと思ったのか――おそら

くその両方だろう。

宏の腰に巻きついている時はギュッと丸めていた指先が、今は足と同様大きく開き、五本の指がそれぞれ違う角度に折れ曲がつてビクついている。

そして、そんな怜奈に絡みつき、彼女の女体を責め続けた桃香もみゆりも

「月ヶ瀬先輩のビクビクがすごすぎですううう！ ああん！ お兄ちゃんの先つぽが、先輩の一番奥に当たってるのが、私にまでズンズン響いてきちゃいますうううう！」

「だしていいよおお！ このまま怜奈ちゃんのドログチヨマ○コにひークンの遺伝子いっぱいインプットしちゃうの、お姉ちゃんが許してあげるううう！」

二人の興奮が乗り移つたように喘いでいた。

「いくぞ！ このまま中に出しちゃうからなああああ！」

「あああん、きてえええええ！ 宏の精液、私の中で思いつきりぶちまけてえええええ！」

私も宏と一つにさせてええええええ！」

宏は凄まじい肉悦の真ただ中、痙攣するようなスピードで腰を振りまくり、

「ああっ！ 怜奈 ああ！ れな ああ ああ ああ ああ！」

彼女の名前を絶叫すると同時に、一際深く腰を突き入れて動きを止めた。

——ドビュッどりゅドプどぎゅッッどりゅドプどふんッッ！

亀頭の先と子宮の入り口を完全に密着させた形で、途切れることなく精液を吐き出す。

「ンツツツはああああ！　れてるううう！　ひろしのあついのわらしのなかれえいっばい  
れてるうううう！」

膣内射精を決められた直後、お嬢さまの顎が限界まで反り返り、左右から耳付きメイド  
に責められ続けた女体が激しく痙攣。

そして——プシヤあああああああああああッツ！

盛大に潮を吹き出した。

「ああン♥」「熱いですううう♥」

桃香もみゆりもその熱い飛沫を浴びて、小刻みに女体を震わせている。

極限のエクスタシーに震える怜奈の下半身は、まるで子宮自身が吐き出されるザーメン  
を吸い取ろうとするように内側へとブルブル収縮。その魂ごと吸い込まれそうな吸引感の  
中で、宏はこれが今日三度目とは思えないほど長い射精を続けた。

そして全てを吐き出し終わると、そのままサッと怜奈の上に身を落とす。

すると丁度目の前に、ハアハアと荒い息をついている濡れた唇が。

「ああー。れなあゝ♥」

「……っあん♥　ひろしい♥」

互いの体液でドロドロの下半身を深く繋げたまま、二人は唇も重ねあう。

そうして、壮絶だった中出しセックスの余韻をねつとりと舌を絡めながら楽しんでいた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお愉快なBlogも更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!